

# 動画視聴ニーズの充足に関するイノベーション 一 時間的制約・場所的制約からの解放

## 1. 「映画」視聴 一「映画館」で「映画」を、映画館の「上映スケジュール」時間に合わせて視聴する

動画視聴ニーズに対応して、最初に「発明」された動画コンテンツは**映画**という形態においてであった。映画は 19 世紀末に発明され、20 世紀前半に社会的に普及した。

## 2. 「テレビ放送」視聴(1) 一「家」で「テレビ放送」を、テレビ局の「放送スケジュール」時間に合わせて視聴する

映画の次に「発明」された動画コンテンツの形態が、**テレビ放送番組**である。最初は、「テレビ放送番組を放送と同時に視聴する」という**同時視聴**型での視聴に限定されていた。

こうした「同時視聴」型の「テレビ放送」視聴は、テレビ局のテレビ放送スケジュールに制約されているという意味で、映画館の上映スケジュールに制約されていた「映画」視聴と同じく、**「視聴時間限定」型動画視聴**である。

20 世紀前半期にテレビ技術の実用化が進み、1932 年にはイギリスの BBC が世界初の定期試験放送を開始している。1935 年にはドイツでベルリンオリンピックのテレビ中継がなされている。1939 年には日本でもテレビ実験放送が開始され、1940 年にはテレビドラマの放送がなされている。

テレビ放送は、最初はテレビカメラで撮影した画像をそのまま放送する**生放送**形式であったが、撮影した動画像を磁気テープに記録する放送業務用ビデオテープレコーダー(Video Tape Recorder、以下 VTR と略記)の登場・発達とともに、VTR に収録したものを編集・加工して放送する**録画放送**形式が次第に主流となっていった。というのも、テープへの記録は、フィルムへの記録と異なり、現像処理などが不要で記録直後の再生確認、記録データの上書き、繰返し再生、スロー再生・スチル再生・高速再生などの特殊再生といったことが可能だったからである。

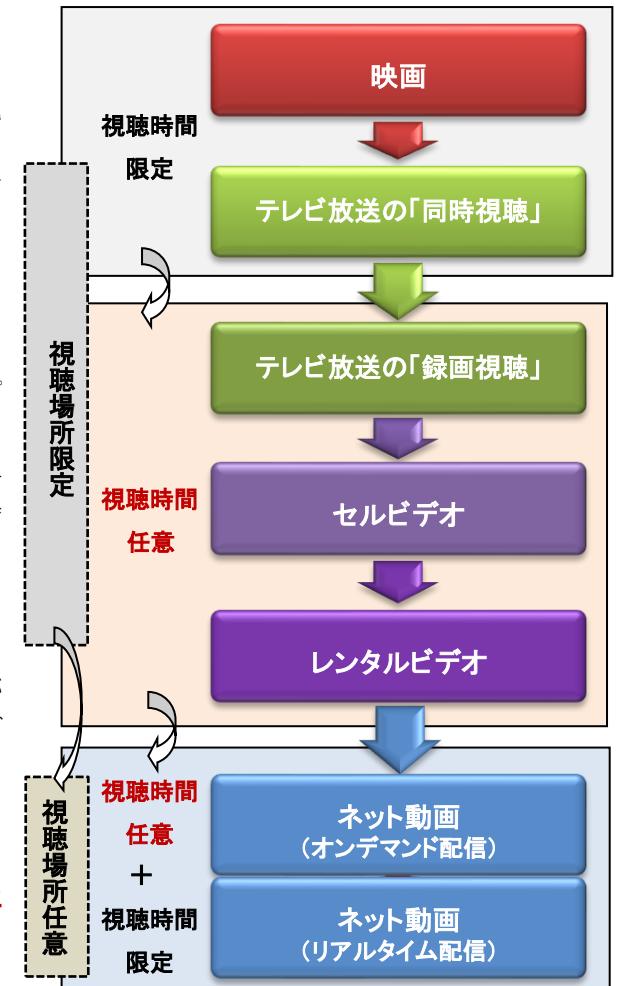
## 3. 「テレビ放送」視聴(2) 一「家」で「テレビ放送」を、自分で VTR に録画して、「自分の好きな」時間に視聴する

放送業務用 VTR 技術を利用して家庭用 VTR の製品開発が進められ、1970 年代後半期には家庭用 VTR の実用化が始まった。家庭用 VTR は、「録画したテレビ放送番組を自分の好きな時間に視聴する」という**録画視聴**型での動画ニーズ充足を可能とした。すなわち、家庭用 VTR という製品イノベーションは、自分のスケジュールに合わせて自分の好きな時間に視聴する**「視聴時間任意」型動画視聴**を可能とした。(後に、DVD レコーダーや HDD レコーダーが開発・利用される。)

## 4. 「ビデオ・ソフト」視聴(1) 一個人消費者向けに販売されたビデオ・ソフトを、家のテレビで「自分の好きな時間」に視聴する

家庭用 VTR の社会的普及にともない、映画会社やテレビ会社は、**セルビデオ**、すなわち、過去の映画やテレビ放送番組を収録したビデオ・ソフトの個人消費者向け販売を開始した。これにより、過去の映画や過去のテレビ放送番組などの中で自分の好きな動画コンテンツを「自分の好きな時間に視聴する」ことが可能となった。

図 1 動画コンテンツの物理的形態に関するイノベーション



## 5.「ビデオ・ソフト」視聴(2) – レンタルビデオ・ソフトをレンタルビデオ店から借りて、家のテレビで「自分の好きな」時間に視聴する

セルビデオの販売価格は、現代とは異なり、最初は高価格であった。そのためビデオソフトをレンタルで低価格で貸し出すというレンタルビデオ店が登場した。アメリカでは1977年にはレンタルビデオ店が開業している。

レンタルビデオ店の登場により、高価格のため購入できる個人消費者の数が限定されていたセルビデオを、多数の個人消費者がレンタルビデオとして低価格で借りることができるように、「映画館で映画を見る」、「家でテレビ放送を見る」という形での動画ニーズの充足に加え、「ビデオ・ソフトを家で見る」という形での動画ニーズの充足が社会的に広がることとなった。

## 6.「ネット動画」視聴 – ネット動画を、スマホやPCなどを利用して「自分の好きな」場所で「自分の好きな」時間に(場所的制約・時間的制約が最も低い視聴スタイルで)、あるいは、「自分の好きな」場所で「配信スケジュール」時間に合わせて視聴する

21世紀になると、インターネットの技術的発達により、映画・テレビ放送番組といった既存の動画コンテンツに加えて個人が撮影・制作した動画コンテンツをネット経由で視聴することが可能になった。スマホの高性能化とともに、高速なネット接続環境を定額で家の外でも利用可能となったことで、「電車の中など家の外で動画コンテンツを見る」という形での動画ニーズの充足が可能になった。

ネット動画の主体は YouTube、Netflix、Amazon Primeなどオンデマンド配信であるが、ニコニコ生放送(<https://live.nicovideo.jp/>)や AbemaTV(<https://abema.tv/>)のようにリアルタイム配信型も存在する。すなわち、ネット動画では、動画コンテンツに関する視聴時間「任意」型視聴と視聴時間「限定」型視聴の両方が存在している。

<関連参考事項>

右記の表2に示したように、「映画」から「TV放送」へのイノベーションは、記録メディアの視点から見ると「前進」的イノベーションであったが、画質を大きく規定する画素数の面からは、「後退」的イノベーションであった。

注1 映画フィルムの画素数は、奥山正次(2018)「デジタルカメラと35mmフィルムの解像度」2018/07/27 ([https://www.dxa.co.jp/column/film\\_d/](https://www.dxa.co.jp/column/film_d/))の記述に基づく推定値である。

注2 日本ではVTR(ビデオテープレコーダー、Video Tape Recorder)という名称で呼ばれるのが一般的であるが、カセット・テープを利用しているという意味で海外ではVCR(ビデオカセットレコーダー、Videocassette recorder)と呼ばれている。

注3 D-VTR(digital video tape recorder)の最初は、SONYが1986年に発表した3/4インチ幅テープ、コンポーネント信号方式のD-1規格である(最初の製品は1987年4月に販売開始されたDVR-1000である)。その後、3/4インチ幅テープ、シリアル伝送方式のD-2規格製品が1988年には発表・販売開始され、シリアル伝送方式が標準となった。

表1 動画記録メディアのレンタルから動画配信へのイノベーション

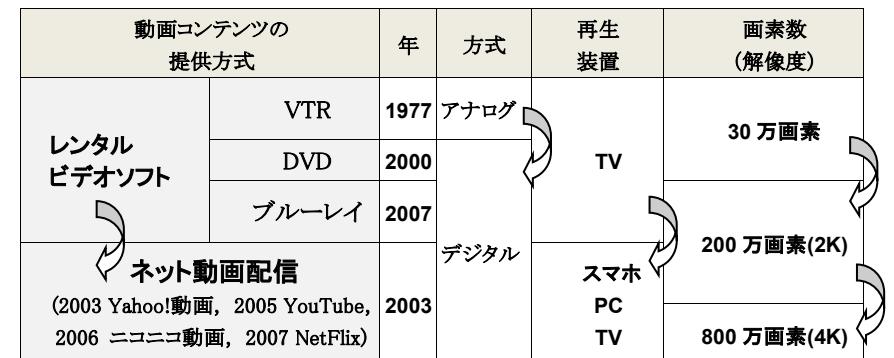
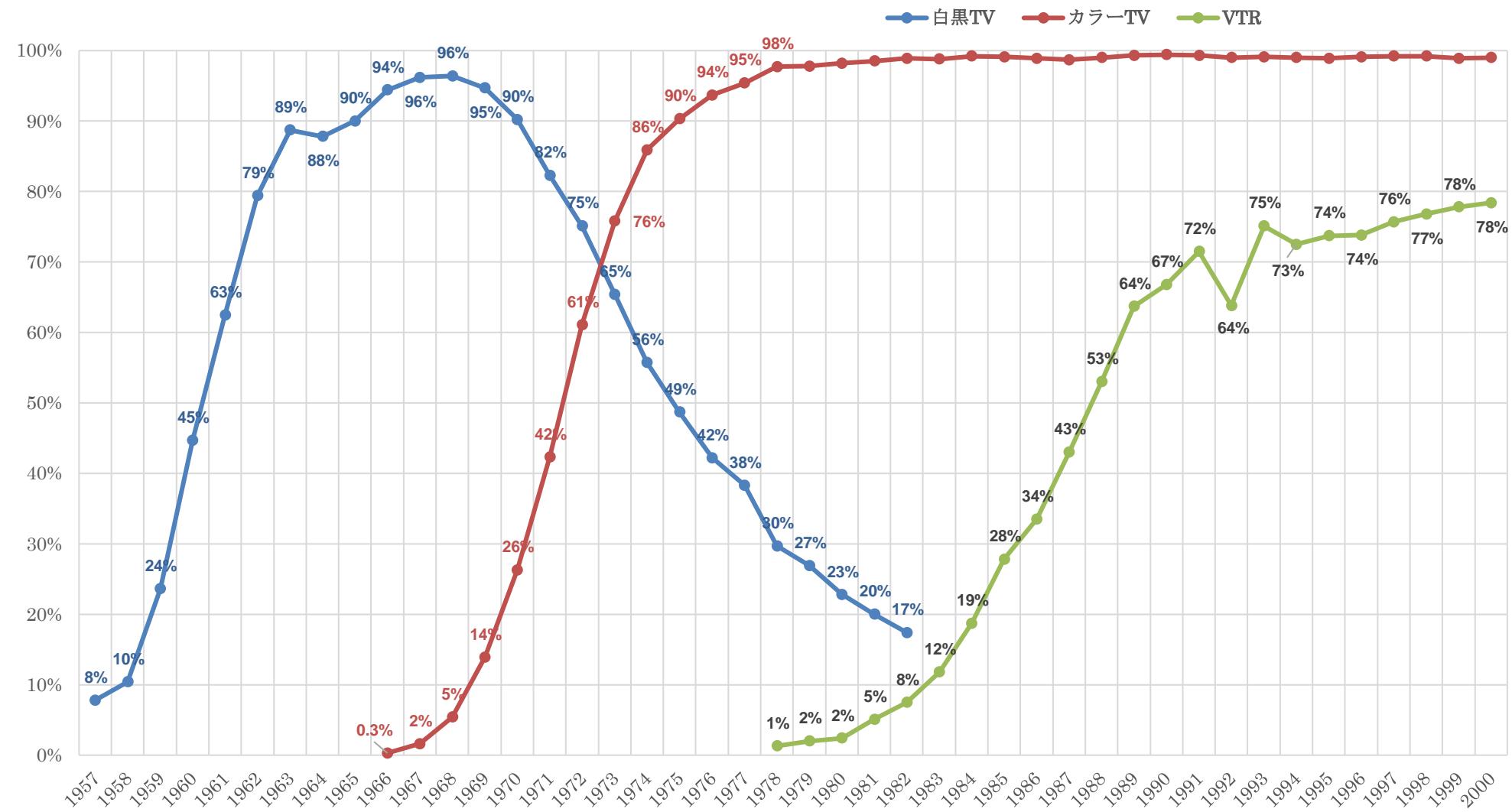


表2 動画記録に関する映画からTV放送へのイノベーション

用途	録画	メディア	年	記録メディア	形状	記録方式	画素数(解像度)
アナログ映画	アナログ映画カメラ	オープンリール型フィルム	1895	フィルム	オープンリール型		500万画素～1,000万画素レベル <sup>[注1]</sup>
アナログTV放送	テレビカメラ	オープンリール型VTR	1956	磁気テープ	アナログ		アナログ・テレビ放送レベル(約30万画素レベル)
		カセット型VTR <sup>[注2]</sup>	1971				
		カセット型D-VTR <sup>[注3]</sup>	1987		カセット型	デジタル	

図2 日本における白黒TV、カラーTV、VTRの世帯普及率の歴史的推移 1957-2000



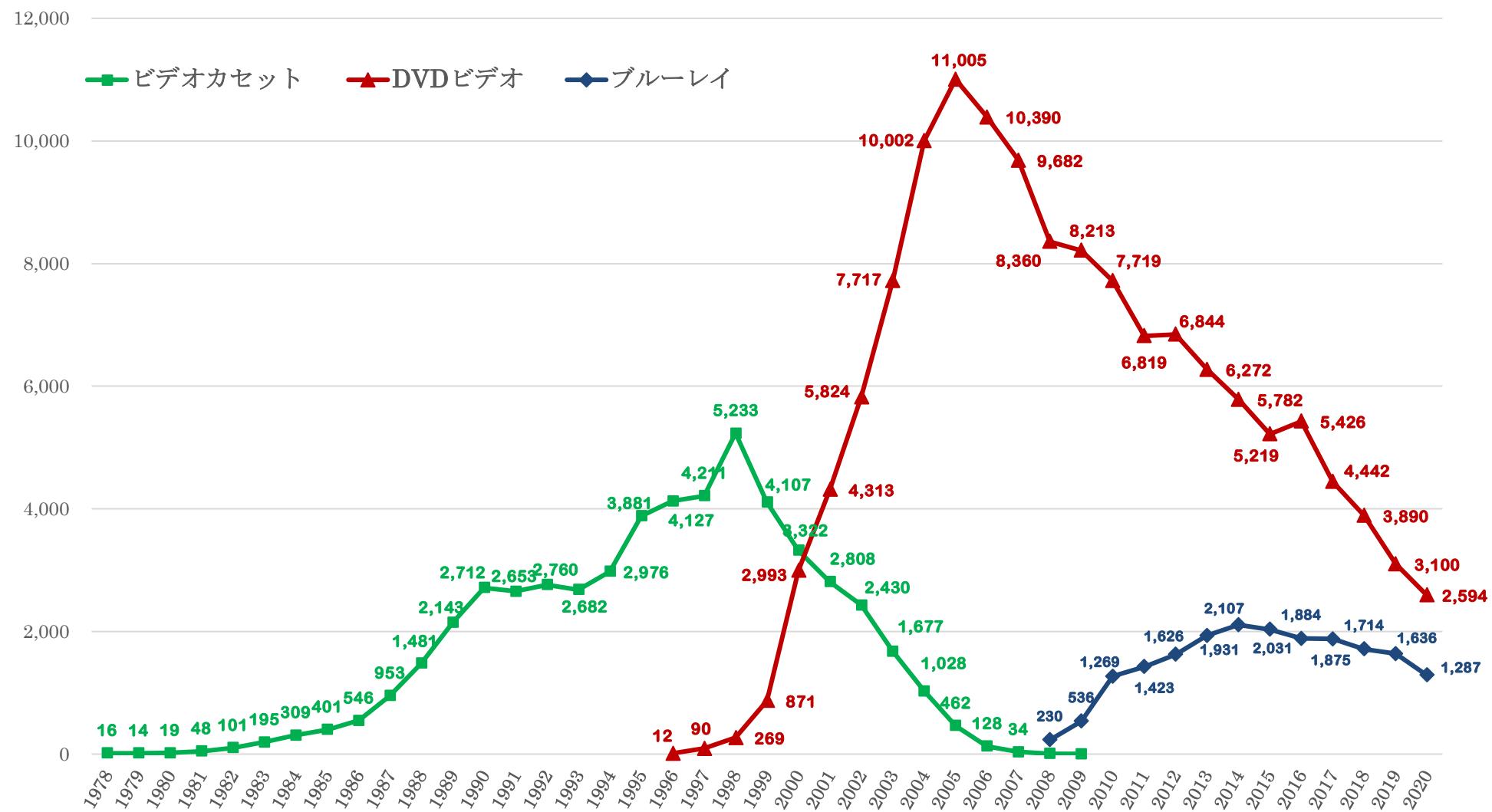
[数値の出典]

内閣府「主要耐久消費財等の普及率(平成 16(2004)年 3 月で調査終了した品目)」

<https://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>

<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1167457/www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/quarter/0403fukyuritsu.xls>

図3 日本におけるビデオソフトの売上数量の推移 1978-2020(単位:万本・万枚)



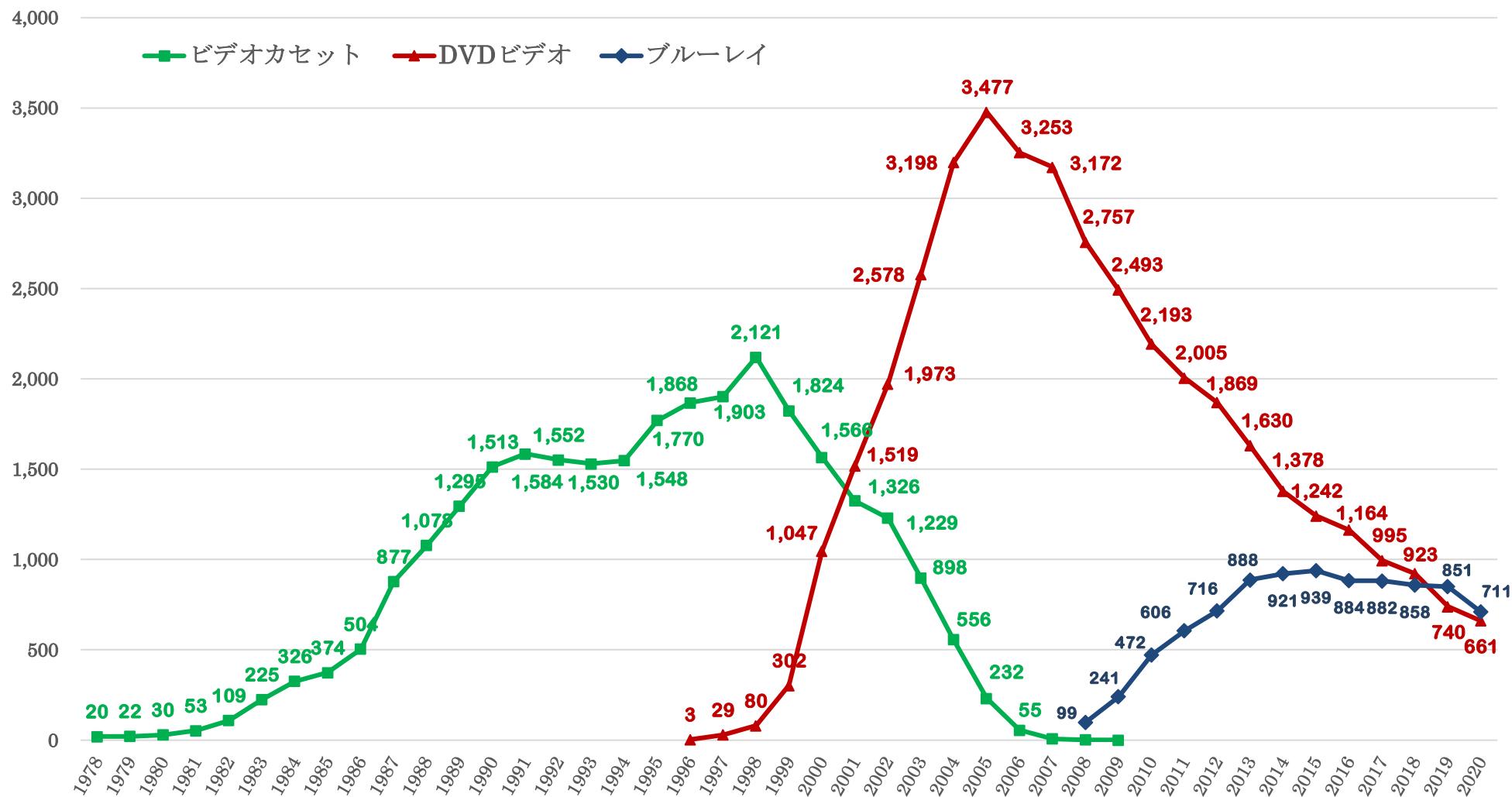
[数値の出典]

日本映像ソフト協会(2021)「ビデオソフトの売上金額と数量の推移（1978年～2020年）表」

<http://jva-net.or.jp/report/>

[http://jva-net.or.jp/report/videomarket\\_2.pdf](http://jva-net.or.jp/report/videomarket_2.pdf)

図4 日本におけるビデオソフトの売上金額の推移 1978-2020[単位:億円]



[数値の出典]

日本映像ソフト協会(2021)「ビデオソフトの売上金額と数量の推移（1978年～2020年）表」

<http://jva-net.or.jp/report/>

[http://jva-net.or.jp/report/videomarket\\_2.pdf](http://jva-net.or.jp/report/videomarket_2.pdf)

図5 日本におけるビデオソフトの記録メディア別・販売形態別売上金額の歴史的推移 1991-2020  
 (実線が個人消費者向けの販売用ビデオの売上金額、点線がレンタルビデオ店向けレンタルビデオの売上金額)

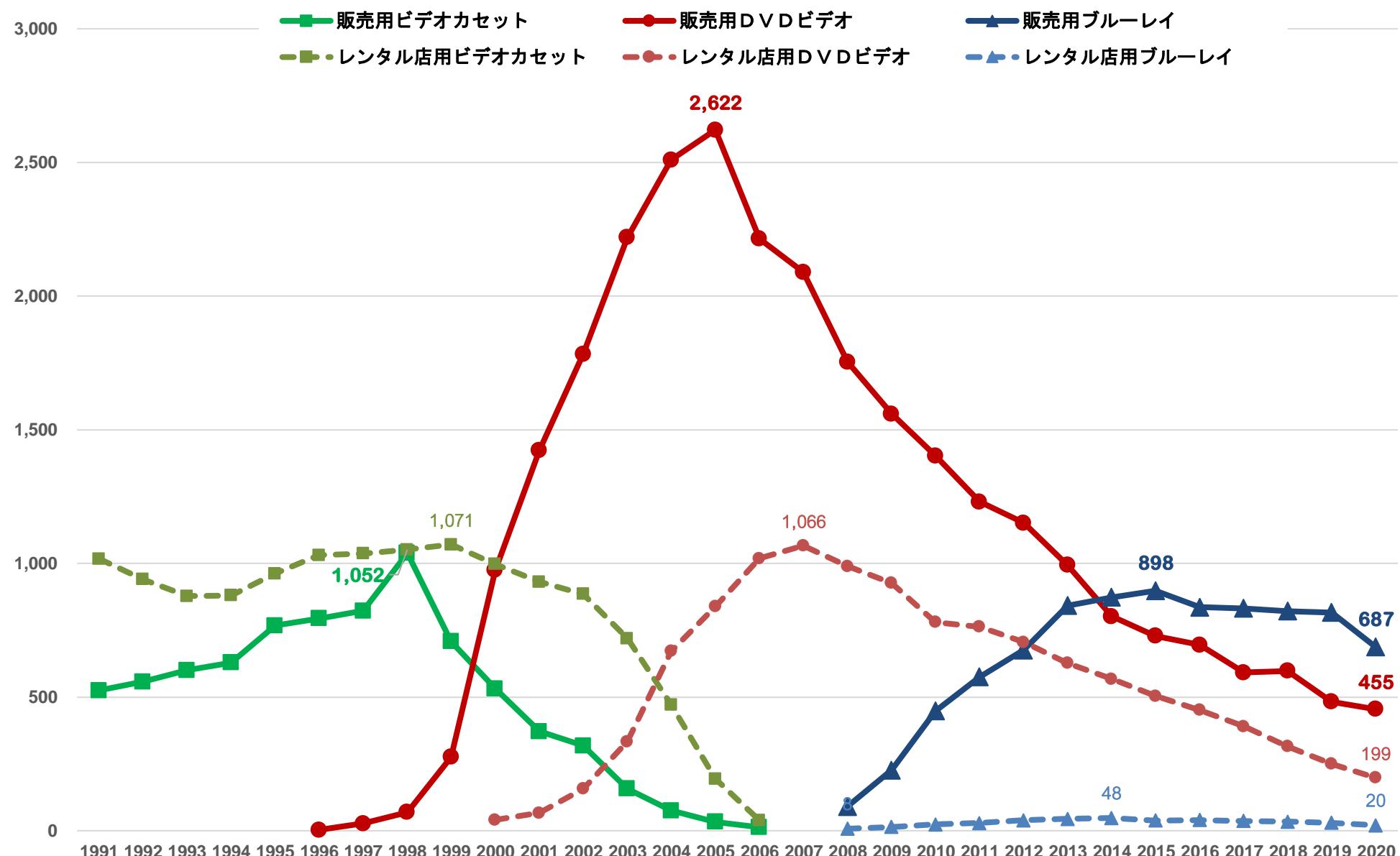
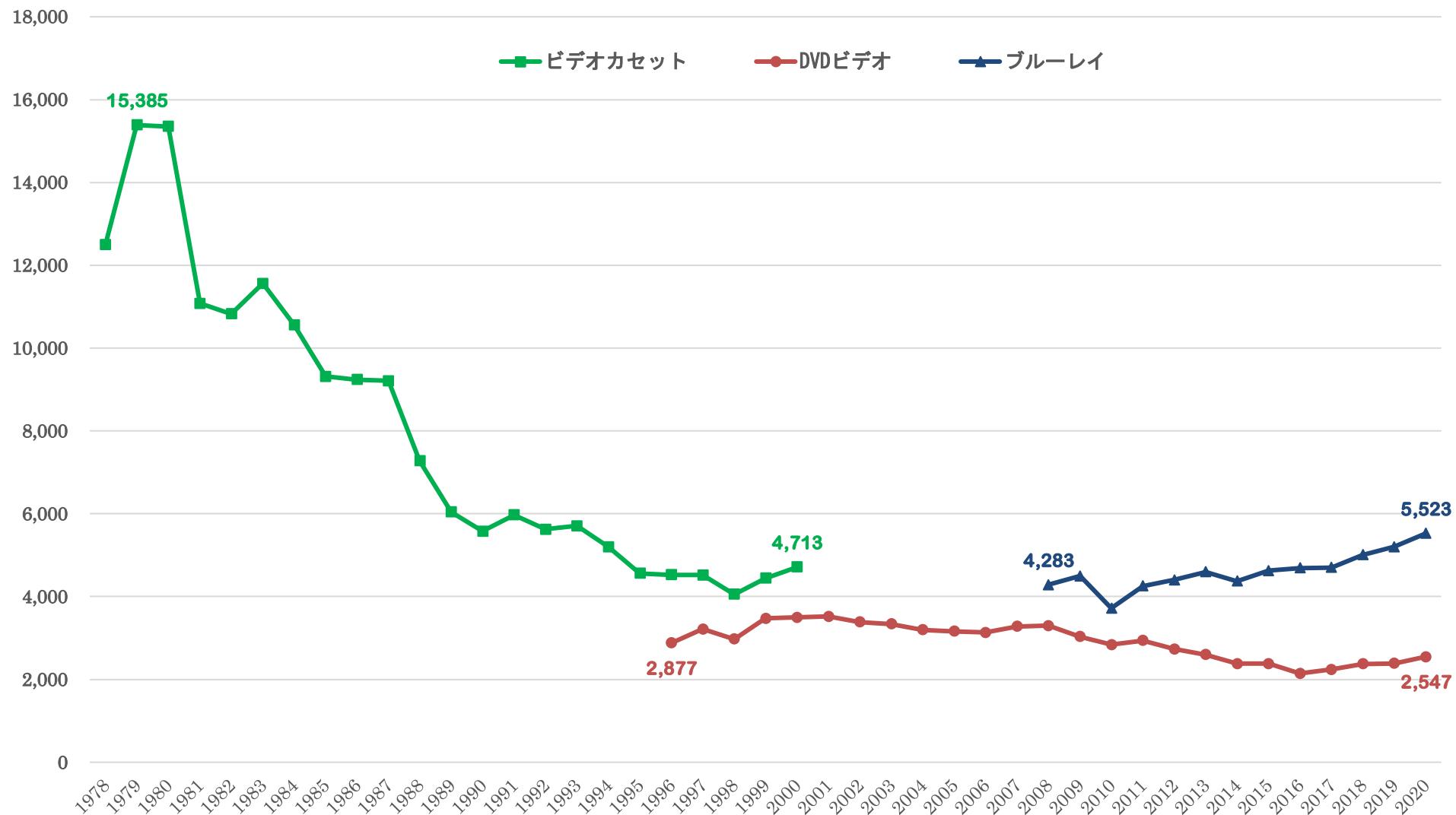


図6 日本におけるビデオソフトの単価の推移 1978-2020[単位:円]



[数値の出典]

日本映像ソフト協会(2021)「ビデオソフトの売上金額と数量の推移（1978年～2020年）表」に基づき、算出した。

<http://jva-net.or.jp/report/>

[http://jva-net.or.jp/report/videomarket\\_2.pdf](http://jva-net.or.jp/report/videomarket_2.pdf)